県立広島大学人間文化学部紀要　11，75-85（2016）

日本語を母語とする二幼児の自動詞・他動詞の誤用

中　石　ゆうこ

1. はじめに

語彙習得は言語習得の最も重要な構成要素の一つである。一般的な語彙の習得では、語の音声的特徴や意味的な特徴の把握が必要である。しかし、「割る―割れる」の「war-」、「壊す―壊れる」の「kowa-」のように語根（Root）を共有する形態的な対を持つ、対のある自動詞および対のある他動詞（以下、自動詞、他動詞）の習得ではそれに加えて、形態のよく似た動詞のうち、どちらが自動詞でどちらが他動詞であるのかを記憶すること、さらに、自動詞構文、他動詞構文の持つ共通した意味的な特徴について、個別の語を超えた文法的性質を把握することが必要であり、一般の語とは異なる特徴を持つ。自動詞、他動詞は、第一言語獲得研究でも誤用が見られる。日本語を母語とする子どもの誤用には、以下のようなものがある（伊藤1990:69）。

（1）*熱いから、冷めるんだ。（3:0）
（2）*（ブランコ）止まって。（3:11）
（3）*伸びちゃ、だめ。（6:3）

伊藤（1990）によれば、他動詞の使用では、初めに他動詞を用いるべき文脈に自動詞を用いる誤用が出現し、次に自動詞に使役の接尾辞-saseをつける時期を経て、正しい他動詞が用いられるようになると言われる。

しかし、筆者の観察では以下の（4）のように他動詞の使用が比較的早い時期から見られた。また、（5）、（6）のように自動詞を用いるべき文脈に他動詞を用いる誤用も観察された。

（4）［おもちゃを開けてもらいたい］
　　開けて。（1:5）
（5）［おもちゃを開けてもらった］
　　*開けた。（1:5）
（6）［お風呂で何をするのか、母に問われて］
　　*温める。（2:4）

そこで本研究では、日本語を母語とする子ども２名の日常生活における発話から自動詞、他動詞に関する誤用を収集し、先行研究の指摘と比較しながら、どのような誤用がどの段階で出現するのかを明らかにする。

2. 先行研究

伊藤（1990）では、他動詞の使用では自動詞的段階が他動詞の使用に先行し、個人差もあるが、その段階が５，６歳まで続く場合があると指摘される（p.68）。そのため、他動詞を用いるべき文脈に

自動詞を用いる誤用が見られ、正しい他動詞形が出現するまで、表１のような４つの段階が見られると述べられている。

表１．他動詞習得への４段階（伊藤1990）

第１段階	第２段階	第３段階	第４段階
自動詞形 例：止まって（誤）	自動詞＋sase 例：止まさして	自動詞＋se/ si 例：開かせて/曲げして	他動詞 例：止めて（正）

Nomura & Shirai（1997）では、伊藤の指摘する他動詞習得への４段階を検証するために、自動詞、他動詞の出現の仕方と誤用について、縦断的発話コーパスの分析がなされている。分析対象となったのは日本人男児である澄晴（Sumihare）の発話（以下､S）で、１歳４か月から２歳４か月の期間のデータが用いられている。それによれば、１歳７か月までは自動詞が先に出現し、１歳８か月からは自動詞と他動詞の両方が出現しており、自動詞が他動詞に先行して出現するという伊藤（1990）の指摘を支持する結果となった。しかし、自動詞に接辞-saseがつく第２段階、および接辞-se/- si がつく第３段階の使用は、２歳４か月までのデータには一度も出現しなかった。例えば､Sの発話では自動詞「起きる」の過剰使用が２歳０か月で観察されたが、その後、第２段階、第３段階を経ることなく、２歳２か月で「起こす」という他動詞が正しく用いられていることが指摘されている。

次の表２はNomura & Shirai（1997）に挙げられた、対象児童が過剰使用した動詞の一覧である。

表２．Sによる自動詞・他動詞の過剰使用

（Nomura & Shirai 1997の表4より、日本語訳は筆者）

月齢	自動詞（誤）→他動詞（正）		他動詞（誤）→自動詞（正）	
	使用した動詞	使用回数	使用した動詞	使用回数
1:11	起きる	1		
2:0	起きる	1		
	開く（あく）	2		
	出る	1		
2:1	開く（あく）	5	開ける	4
	冷める	1	抜く	1
	残る	2	固める	1
2:2	上がる	3		
	濡れる	1		
	乗る	1		
	退く（のく）	1		
2:3	冷める	1		
2:4	起きる	1		
	逃げる	1		

表２によると、他動詞を使うべき文脈に自動詞を使用する誤用に比べて、自動詞を使うべき文脈に他動詞を使用する誤用は、動詞の種類も回数も少ないことが分かる。また、自動詞、他動詞の過剰使用による誤用の出現割合は、自動詞、他動詞の正用と比較すると１.９％と、極めて少数であることが報告されている。

ここで注目したいのは、「開く―開ける」の混乱に対する指摘である。２歳１か月という同時期に、他動詞を使うべき文脈に自動詞を使用する誤用が５回、自動詞を使うべき文脈に他動詞を使用する誤

用が４回観察されている。この対に代表されるように、自動詞、他動詞の形態がよく似ていることが、運用上の誤用が一方向の混乱ではなく、他動詞を使うべき文脈に自動詞を使用する誤用と自動詞を使うべき文脈に他動詞を使用する誤用が混在することにつながる理由であるとされる（Nomura & Shirai. 1997: 239）。

もし自動詞、他動詞の形態がよく似ていることが自動詞、他動詞の混乱の原因になるのであれば、他動詞を使うべき文脈に自動詞を使用する誤用に比べて、自動詞を使うべき文脈に他動詞を使用する誤用は、動詞の種類も回数も少ない理由を説明できない。これに関して、Nomura & Shiraiでは、インプットでも自動詞の使用が多いため、誤用にも自動詞の出現が多いと説明されている。興味深い指摘であるが、Nomura & Shiraiも述べるように、個人差という要因を排除するためにも、別の日本語児の発話を観察する必要がある。よって本研究では、独自のデータを収集し、第一言語における自動詞、他動詞の誤用を観察する。

3. 分析

材料

本研究で用いるのは、日本語を母語とする２児の自動詞、他動詞に関する誤用データであり、筆者が採集したものである。対象児はM（女児、2005年７月生まれ）H（男児、2007年10月生まれ）の２名である。全体の資料収集期間は2009年３月から2015年10月までの６年７か月で、その間、平日平均６時間、週末平均12時間に渡って、養育者である筆者によるデータ収集が行われた。以下に、Nomura & Shirai（1997）のSとM、Hのデータの月齢を示す。

図１．SとM，Hの月齢の比較

データ収集では、対象児と養育者、あるいは対象児と家族の発話の中で、対象児の発話に見られた自動詞、他動詞の誤用が記録された。データには、対象児の発話、発話の状況、月齢、使用した動詞、誤用の種類、対象児による自己修正の有無が記載された。発話は、自己修正を行った場合でも修正前の発話で誤用があった場合は、誤用例として抽出した。誤用の中には、他動詞を使うべき文脈に自動詞を使用する誤用および自動詞を使うべき文脈に他動詞を使用する「自動詞・他動詞の過剰使用に関する誤用」と、自動詞、他動詞に関わる「形態の誤用」があった。「自動詞・他動詞の過剰使用に関する誤用」は、例えば以下のようなものであった。

（７）他動詞（誤）→自動詞（正）
　　「みんな揃えて（→揃って）１，２，３！」（M, 3:11）
（８）自動詞（誤）→他動詞（正）
　　「お母さん、これ、ほどけて（→ほどいて）。」（H, 2:11）

「形態の誤用」は誤形成に関するもので、例えば以下のようなものであった。

（9）「お茶、沸けてますか。」（M, 5:2）

これらの誤用の種類の他に、もともと対を持たない自動詞、他動詞をもとにすると考えられる自動詞的な動詞、他動詞的な動詞を用いる誤用があったが、分析対象外とした。これらは、Mの発話に1例「よいて（＝どいて）」（5:0）、Hの発話に2例「校門をくぐり抜いた（＝くぐり抜けた）あとで会う」（7:2）、「夏（を）、駆け抜いた（＝駆け抜けた）」（7:11）の計3例のみであった。本研究で収集した誤用データの一覧は、本論文末の付録を参照されたい。

4. 結果と考察

表3、表4では、児童ごとに自動詞・他動詞の過剰使用および形態の誤用を抽出した結果を示す。小計の数字は延べ語数、（ ）内の数字は異なり語数である。なお、紙面の都合上、誤用のなかった月齢の行は省略している。

表3．Mの自動詞・他動詞の過剰使用と形態の誤用

月齢	自動詞（誤）→他動詞（正）		他動詞（誤）→自動詞（正）		形態	
	使用した動詞	使用回数	使用した動詞	使用回数	使用した動詞	使用回数
3:8					*破した	1
3:10					*破した	1
			どける	1		
3:11			揃える	1		
			切る	1		
			固める	1		
4:1			壊す	1		
			届ける	1		
4:4	つく	1				
4:6			どける	1		
4:8	抜ける	1				
5:2					*沸けてます	1
5:10	切れる	1				
6:6	抜ける	1				
6:9	収まる	1				
8:1					*沸けた	1
	曲がる					
8:2					*沸けた	1
8:10					*はさめた	1
9:3			分ける	1		
9:7					*沸けた	1
10:3	沸く	2				
小計	7（6）		8（7）		7（3）	

MはSと異なり、同じ月齢の時期に、同じ動詞の誤用をすることはなかった。別の月齢で同じ動詞で誤用が見られたのは、「どける」が2回、「抜ける」が2回、「入れる」が2回であった。また、形態の誤用では、同じ動詞を長期間、誤用し続けることが指摘でき、「破す」が2回、「沸ける」が4回

であった。先行研究で着目された-suという他動化接辞に関連する可能性がある形態の誤用としては、他動詞「破る」が「破す」となったものが当てはまるが、伊藤（1990）で第２段階として指摘された自動詞＋sase（例：破れさせる）、および第３段階として指摘された自動詞＋se/ si（例：破れせる/破れす）の使用は一例もなかった。

表４．Hの自動詞・他動詞の過剰使用と形態の誤用

月齢	自動詞（誤）→他動詞（正）		他動詞（誤）→自動詞（正）		形態	
	使用した動詞	使用回数	使用した動詞	使用回数	使用した動詞	使用回数
1:5			開ける	1		
1:8	起きる	1				
			開ける	1		
2:0	落ちる	1				
2:3			入れる	1		
2:4			温める	1		
2:5						
					*替りて	1
	開く（あく）	1				
	替わる	1				
			どける	1		
2:11			ほどける	1		
	開く（あく）	1				
			入れる	1		
3:2					*とれられた(捕られた)	1
	流れる	1				
			つける	1		
3:4			取る	1		
3:8			流す	1		
4:4			開ける	1		
			つける	1		
4:6	育つ	1				
	移る	1				
			戻す	1		
4:7					*はさめた	1
4:9	決まる	1				
4:10					*かぶして	1
5:0			つける	1		
			開ける	1		
6:5			載せる	1		
6:6	はまる	1				
6:7					*冷ませよう	1
6:8	抜ける	1				
6:9					*解かされていない	1
6:10	切れる	1				
7:1	覚める					
7:11			つける	1		
計	12（11）		17（10）		6（6）	

HもSと異なり、同じ月齢の時期に、同じ動詞の誤用をすることはなかった。別の月齢で同じ動詞で誤用が見られたのは、「開く」が２回、「開ける」が４回、「入れる」が２回、「つける」が４回で

あった。Mと異なり、形態の誤用は、一定の動詞で繰り返されるわけではなかった。先行研究で着目された-suという他動化接辞に関連する可能性がある形態の誤用としては、他動詞「被る」が「被す」となったもの、他動詞「冷ます」が、使役形「冷ませる」となったもの、他動詞「解く」に受動の接尾辞-sareruがつき、「解かされる」になったものは観察されたが、伊藤（1990）の指摘する自動詞＋sase、および自動詞＋se/ siの使用は、Hにおいても一例もなかった。

ここまでをまとめると、誤用の見られた自動詞、他動詞の異なり語数はMでは13語、Hでは21語であった。両児とも、「自動詞・他動詞の過剰使用に関する誤用」（他動詞を使うべき文脈に自動詞を使用する誤用、自動詞を使うべき文脈に他動詞を使用する誤用）が収集期間の全体に渡って見られた。Nomura & Shirai（1997）で分析されたSのデータに従い、2歳4か月までの時期のデータに限っても、本研究のデータでは、他動詞を使うべき文脈に自動詞を使用する誤用が2例、自動詞を使うべき文脈に他動詞を使用する誤用が4例であり、他動詞を使うべき文脈に自動詞を使用する誤用が多かった先行研究とは異なる結果となった。また、自動詞、他動詞の形態的な類似とその規則に起因すると考えられる「形態の誤用」は、長期にわたって観察された。

Nomura & Shirai（1997）で取り上げられた「開く―開ける」については、Mでは誤用が見られなかった。Hでは、「開く」が2回、「開ける」が4回の誤用があり、Nomura & Shirai（1997）の対象児Sと同様、他動詞を使うべき文脈に自動詞を使用する誤用、自動詞を使うべき文脈に他動詞を使用する誤用の両方向の誤用が見られた。以下に、Hに見られた誤用を月齢順に提示する。

（10）［おもちゃを持ってきた。要求して開けてもらった直後］
「あけた！」（H, 1:05）

（11）［窓を開けることができて］
「あけた！」　（H, 1:08）

（12）［ヨーグルトのケースを開ける方法を説明して］
父：「どうやってあけるん？」
「まず、これをパカッてあいて…」（H, 2:05）

（13）［金魚の水槽のふたを開けておいてほしい］
「まだ、あくの！」（H, 2:11）

（14）［箱の中身を取り出せる状態にしようと、箱を開けた瞬間］
「あけた！」（H, 4:04）

（15）［自分の目の様子を説明して］
「目が開きそうだけど、開けてない。」（H, 5:00）

Hの発話に出現する「開ける―開く」の活用形と出現時期は以下のようにまとめられる。

表５．Hの「開ける―開く」の活用形と出現時期

タ形	開けた（1:5, 1:8, 4:4）	
テ形	開けて（1:5, 5:0）	開いて（2:5）
辞書形		開く（2:11）

日本語を第二言語として学ぶ学習者の自動詞、他動詞の使用では、活用形が使用できる動詞を文脈に関係なく用いる段階があるとされる（中石2005）。一方、上記の分布によると第一言語の発達では、テ形の「開けて」、「開いて」が２歳５か月の時点で揃っているにもかかわらず、５歳でも誤った一方を用いる誤用が見られた。

他の動詞対で、動詞対の両方に誤用が観察できたのは、Mの「切る―切れる」のみであった。

(16)［ナイフでホットケーキを切っていて、切ることができたとき］
「切った！」（M, 3:11）

(17)［散髪したばかりの母に、保育園のお迎えで会い、髪が短いことに気づいて］
「あ、お母さん、髪切れた！」（M, 5:10）

(16)、(17) の例は文脈に合わない発話であった。特に、(16) の例は、結果可能の表現（張1997）であり、自動詞が求められる文脈である。第二言語として日本語を学ぶ学習者はこのような場面で自動詞を用いることが困難であることが指摘される（都築2001など）が、日本語を母語とする子どもであっても、同様の誤用をすることが明らかになった。結果可能の文脈での誤用は、Mの発話では（16）の他にもう一例見られた。

(18)［タオルを持ってこなかったことを怒られて］
「ちょっと向うにあったから届けなかったんです。」（M, 4:01）

Hの発話では、(10)、(11)、(14) に加え、以下の４例があった。

(19)［ものを袋に入れようとして、なかなか入らない］
「いれないー！」（H, 2:03）

(20)［夜、洗面所に一人で行ったが、困って母のところに帰ってきた］
「えっとね、電気がつけん。」（H, 3:03）

(21)［けん玉をやっていて］
「さっき、載せそうになったよ!」（H, 6:05）

(22)［床に足を付けようとして］「足がしびれて、（足が床に）つけない。」（H, 7:11）

これらの結果可能の文脈で用いられた動詞は、(10)、(11)、(14) の「開ける」、(16) の「切る」、(18) の「届ける」、(19) の「入れる」、(20)、(22) の「つける」、(21)「載せる」であり、「切る」を除い

ては、全て-eruで終わる他動詞である。第二言語学習者は、「調べる」、「数える」、「曲げる」、「並べる」などのeru他動詞を可能形と判断する場合がある（中石2010）。eru他動詞は、五段動詞の可能形と同一形態で終わる動詞であり、可能形と混同されやすい、まぎらわしい動詞であると考えられる。第一言語における使用でも、可能の文脈でeru他動詞が用いられているのは、他動詞と可能形の混同による可能性がある。

これらの使用例から、第一言語習得における自動詞、他動詞の発達を見る場合も、自動詞、他動詞を文脈から切りとって短文で抜き出し、終止形にまとめて分析する方法では十分ではなく、自動詞、他動詞の活用形や出現する文脈まで考慮に入れた分析が必要であることが分かる。

5. まとめ

本研究では、日本語を母語とする子ども２名の発話における自動詞、他動詞に関する誤用の分析から、先行研究の指摘と比較して次のことが明らかになった。

Nomura & Shirai（1997）では、他動詞を使うべき文脈に自動詞を使用する誤用は出現時期が早く、それに比べると、自動詞を使うべき文脈に他動詞を使用する誤用は、動詞の種類も回数も少ないことが示された。本研究における発話データの観察からは、「自動詞・他動詞の過剰使用に関する誤用」のうち、他動詞を使うべき文脈に自動詞を使用する誤用、自動詞を使うべき文脈に他動詞を使用する誤用の両方が収集期間の全体に分かって見られ、自動詞の発達が他動詞に先行するとは言えないことが明らかになった。伊藤（1990）で他動詞習得への第２段階として指摘された自動詞＋sase（例：破れさせる）、および第３段階として指摘された自動詞＋se/ si（例：破れせる/破れす）の使用は本研究のデータには一例も表れなかった。

また、第一言語においても第二言語習得同様、結果可能の文脈において他動詞を用いる誤用が複数見られることが分かった。この結果から、第一言語における自動詞・他動詞の発達を見る場合も自動詞、他動詞の形態や文レベルの使用にのみ着目するのでは十分ではなく、第二言語習得研究で取られた手法と同様に、文脈における選択のされ方まで考慮に入れた分析が必要であることが指摘できた。

今回のデータ収集では、日本語を母語とする子どもの日常生活の発話から、誤用のみを抽出して書き留めたが、活用形、文脈を観点に入れた分析を行うためには、今後は、誤用、正用の区別を一旦保留にし、全ての使用を抽出することで、そこに見られる傾向をつかむことが必要である。

謝辞

本研究の一部は、科学研究費補助金（研究スタート支援）（課題番号：26884040, 研究代表者：中石ゆうこ）の助成によって行われました。

引用文献

伊藤克敏（1990）『こどものことば―習得と創造』勁草書房

張威（1997）『結果可能表現の研究－日本語・中国語対照研究の立場から－』くろしお出版

都築順子（2001）「『このカバン、たくさん物がはいれそうだね。』の誤用に関する一考察」平成13年度第１回日本語教育学会研究発表会発表資料

中石ゆうこ（2005）「対のある自動詞・他動詞の第二言語習得研究－『つく―つける』,『きまる―きめ

る』，『かわる―かえる』の使用状況をもとに－」『日本語教育』124号，pp.23-32., 日本語教育学会
中石ゆうこ（2010）「日本語学習者にとって『まぎらわしい』形態の他動詞－中国語母語学習者のeru他動詞と可能形との混同から－」日本語教育学会2010年度秋季大会
Nomura, M. & Shirai, Y. (1997). Overextension of intransitive verbs in the acquisition of Japanese. In E. V. Clark (Ed.), *Proceedings of the Twenty-Eighth Annual Child Language Research Forum*, pp. 233-242., Stanford, CA: CSLI Publications

付録

Mによる自動詞・他動詞に関する誤用

発話	児童	月齢	動詞	語用の種類	状況
「Hがやぶれ…やぶした。」	M	3:08	破る	形	Hに紙を破られたことの報告。
みんな揃えて、1，2，3.	M	3:11	揃える	自他	かけごえ
切った！	M	3:11	切る	自他	ナイフでホットケーキを切っていて、切ることができたとき。
どけて！	M	3:10	どける	自他	弟が同じ椅子に座ってきたので、邪魔になって。
Hがやぶした！	M	3:10	破る	形	本を破られて。
これ、こわした？	M	4:01	壊す	自他	おもちゃが壊れたかどうか聞いて。
ちょっと向うにあったから届けなかったんです。	M	4:01	届ける	自他	タオルを持って来なかったことを怒られて。
「ここにつく！」 祖母「え？」 「ここにつけるんよ！」	M	4:04	つく	自他	箱に紙で作った顔を、のりで貼ろうとして。
ちょっと、どけて！	M	4:06	どける	自他	イスを踏み台にしようとしたが、Hが使っていたので。
二人で力を合わせて、ぴょーんって抜けたらね、ぴょーんって。	M	4:08	抜ける	自他	新聞受けから新聞を引っ張り出した時の様子を説明して。
よいて！	M	5:00	よく	?	弟が通り道の邪魔になって。
お茶、わけてますか？	M	5:02	沸ける	形	お茶を飲みたくなって、母に聞いた。
あ、お母さん、髪切れた！	M	5:10	切れる	自他	散髪後の母に、保育園のお迎えで会って。
抜けた！	M	6:06	抜ける	自他	散歩中、目印の郵便ポストを通り過ぎた瞬間。
こたつが収まっとるわ。	M	6:09	収まる	自他	母がこたつを片付けたことに気づいて。
お母さん、このハンガー曲がらせられる？ スプーン、曲げたりできる？	M	8:01	曲がる	自他	
コーヒー沸けたよ。	M	8:01	沸ける	形	コーヒーメーカーの音が止まったのに気付いて。
沸けた？	M	8:02	沸ける	形	湯が沸いたかどうか聞いた。
今日、学校のドアで指を挟めた。	M	8:10	挟める	形	
赤ちゃんの腕って、1，2，3って分けてるんよ。	M	9:03	分ける	自他	赤ちゃんの腕の肉の付き方を説明して。
沸けたん？	M	9:07	沸ける	形	コーヒーを注ぎ終わったのを見て。
ポットで湯を沸いて入れたんよ。	M	10:03	沸く	自他	
お湯を沸いてからかけるおやつを食べたんよ。	M	10:03	沸く	自他	

Hによる自動詞・他動詞に関する誤用

発話	児童	月齢	動詞	語用の種類	状況
「あけて！」（開けてもらう） 「あけた！」	H	1:05	開ける	自他	おもちゃを持ってきた。要求して開けてもらった直後。
あけた！	H	1:08	開ける	自他	窓を開けることができて。
おきて！	H	1:08	起きる	自他	自分を起こしてほしい。
落ちてもいい？	H	2:00	落ちる	自他	のりを、わざとテーブルから落とそうとして。
いれないー！	H	2:03	入れる	自他	ものを袋に入れようとしたが、なかなか入らない。
母：「今日はお風呂で何をするの？」「温める！」	H	2:04	温める	自他	自分が温まると答えたかった。
M、ちょっとここ、どけて。	H	2:05	どける	自他	Mが邪魔になったので、どいてもらおうとして。
父：「どうやってあけるん？」「まず、これをパカッてあいて…」	H	2:05	開く	自他	ヨーグルトのケースを開ける方法を説明して。
これ、かわるの、これ！	H	2:05	替わる	自他	コンセントのプラグを差し替えようとして。
母：「コンセント？」「これ、かりてもいい？」	H	2:05	替える	形	コンセントのプラグを差し替える許可を求めて。
これ、いれさせて	H	2:11	入れる	自他	氷菓子の空き容器にティッシュを詰めたい。
お母さん、これ、ほどけて	H	2:11	ほどける	自他	紐をほどいてほしい。
まだ、あくの！	H	2:11	開く	自他	金魚の水槽のふたを開けておいてほしい。
ああ、とれられた！	H	3:02	捕る	形	おもちゃをMに捕られた。
おしっこしたのに、なんでティッシュを流れてないの？	H	3:02	流れる	自他	トイレの様子を質問。
えっとね、電気がつけん	H	3:03	つける	自他	夜、洗面所に一人で行ったが、困って母のところに帰ってきた。
これ、とれた。Mが。これ、とった。Mが。	H	3:04	取る	自他	
あれ、1こ流してないよ。	H	3:08	流す	自他	トイレで、残った便をみつけて。
あけた！	H	4:04	開ける	自他	箱の中身を取り出せる状態にしようと、箱を開けた瞬間。
「つけたら、つけた」 母：「え？」 「つけたら、つけれた」	H	4:04	つける	自他	キャップを自分でつけることができたことを報告して。
大根、育ちたいなあ	H	4:06	育つ	自他	
戻してきてない…戻ってない	H	4:06	戻す	自他	自宅の車で出かけた父が帰っていないことを確認して。
こっちにうつろうと思うんよ。混ざってもいい？	H	4:06	移る	自他	おはじきを色分けした後、混ぜたくなった。
お父さんが挟めた。	H	4:07	挟む	形	ドアに指を挟んで。
班長って、どうやって決まるん、M？	H	4:09	決まる	自他	Mに班長の決め方について質問して。
風邪なのに、牛乳かぶして大変だったね。	H	4:10	被る	形	誤って牛乳を被ってしまった。
どうしてトリケラトプスは、トリケラトプスっていう名前がつけたんだろう。	H	5:00	つける	自他	
目が開きそうだけど、開けてない	H	5:00	開ける	自他	自分の目の様子を説明して。
さっき、載せそうになったよ!	H	6:05	載せる	自他	けん玉をやっていて。
ぼく、これ、1人ではま…はめれるんだよ。	H	6:06	はまる	自他	水筒のひもをフックにつけられることを言いたくて。
この油揚げ、冷ませようとして、フーってしたらね、飛んでった。	H	6:07	冷ます	形	
アメリカの農場で、うし、ホルスタインか何かの血が抜けています。心臓も抜けています。	H	6:08	抜ける	自他	テレビで見たニュース映像を報告した。
未だに解かされていない、プールの謎！	H	6:09	解く	形	
あ、本当だ。切れてる。	H	6:10	切れる	自他	寝ている間に母がHの爪を切ったことを翌朝報告され、爪を見て。
で、落として目を覚めるの。	H	7:01	覚める	自他	父がMを抱えて、目を覚まさせようとしている様子を見て。
校門くぐりぬいたあとで、会う人、おるじゃん？	H	7:02	くぐりぬく	?	
Hは、夏、駆け抜いたっていうよりね。	H	7:11	かけぬく	?	
足がしびれて、つけない。	H	7:11	つける	自他	床に足を付けようとして。

県立広島大学人間文化学部紀要　11，75-85（2016）

Abstract

The Errors of Transitive and Intransitive Verbs by Two Japanese L1 Children

Yuko Nakaishi

This study investigated the longitudinal development of transitive and intransitive verbs by two Japanese L1 children and found they Produced both transitive and intransitive verbs in their early stage of development. It is different from the claim by Ito (1990) and Nomura & Shirai (1997) that Japanese children go through an intransitive stage before they start to use correct transitive verbs.

Ito's prediction that the causative suffix －*sase* and －*se/-si* attached to intransitive verbs would occur after the stage of intransitive overextension did not observed in the data.

The errors that the Japanese children use transitive verbs in the result-potential expressions are similar to the usage by L2 learners.